大堀相馬焼き物語

制作／浪江まち物語つたえ隊
絵・文／いくまさ鉄平

浪江町の高瀬川の地から生まれた大堀相馬焼。
その物語は相馬藩の給人
半谷休閑に使える焼き物
職人の左馬が焼いた
一つの茶碗から始まります。

「左馬、左馬はおらんか」
「ご主人様、何でございましょう」
「おお、左馬か・・・おまえがこの茶碗を
作ったというか本当か」
「はっはい、この茶碗が、なにか？」
「そうか、お前が作ったのか、
色といい風合いといい見事じゃ。
いずこにおいてこの技を身に着けた」

※給人／商いを許された侍

「相馬においてでございます」
「相馬といえば相馬駒焼き、それがこれか？」
「いえいえ、めっそうもありません。
相馬駒焼といえば藩主相馬様への献上品、
私のようなモノが手を出せるものではありません。」
「謙遜せずとも良い。宮中の茶器や花器として
用いられる官窯にも引けを取らぬ出来栄え、
見事じゃ。何か秘訣があろう」
「秘訣といわれても、しいて言えば
土でございましょうか」
「土？」

「井出の美森（うつくしもり）の土でございます。
ある日、焼き物に適した土はないものか
山中をさまよっておりましたら、
偶然、この土に出会ったのでございます」
「そうか、我が地にかくも
良き土があろうとは・・・・うん、
左馬、この焼き物、我らに伝授せい。
これは大堀だけでなく相馬の特産品になるぞ」
「伝授とは何ともったいないお言葉。
しかし、我が焼き物が
お家のためになるのであらば喜んで」
「お殿様は特に産品のない、
この地のことを気にかけておられる。喜ばれるぞ」
「産品がない・・・・」
「そうじゃ、他国から来た
おぬしは知らないだろうが、
この地の難点は高瀬川沖積地（ちゅうせきち）に
開けた水田は少ないことだ。

近年、開拓を進めて
まいったが、
それでも村の石高（こくだか）は
四十石とわずかだ。
村の者は、山畑を開墾（かいこん）して
煙草を作っているが追いつかない」
「そうでございましたか」
「よし村人をあつめろ」
「百姓をですか」
「百姓にとってこの冬の時期は何もない。
始めるにはちょうど良い」

「殿、お呼びでしょうか」
「ワシはもう殿ではない
半谷、ワシは藩主を6代目に譲り、
政から身を引いた身、いい加減しろ。」
「失礼いたしました。つい・・・」
「まあ、よい。
ワシもやり残したことがあるからなあ。
もっともっと藩の産品作りに
力を注がねば民の暮らしは戻らぬ
ついては左馬が作る茶碗じゃが、
今はどのような塩梅か？」
「大堀相馬焼は今や大堀村のほか
隣の井出村、小野田村の在郷給人郷士層を
中心に広がりを見せております。ただ」

「ただ？・・ただどうした？」
「まがい物が増えているようで、
職人どもは危惧しております」
「それはまずいな。・・・・・
まねるものがでるのは
評判が良い証、良いことでもあるが。
それを放置しておいてはいかん。
産品には希少価値というものがかかせん。
まがい物が出回るなど、もっての外じゃが、
誰でも作れるのも良いこととは言えん。
半谷、現在、真の大堀相馬焼を焼くものは何人おる？」

「確か7人かと」
「よし、そこまでとしろ。
そして他の領地に技術が
流れ出ぬよう 一子相伝、
つまり技術を教えるのも
長男のみとするのじゃ。よいな」
「しかし皆、百姓が本業、
あの者だけで伝統を守り続けられるか・・・」
「それを出来るようにするのが我らの役割じゃ。
すぐには無理でも焼き物で飯が
食える様にするのが我等、政の役目じゃ」
「確かに」
「そして相馬藩領内では
他藩の瀬戸物が出回らないように
『下り瀬戸物』商売禁止令を出すこととする。
藩を上げて大堀相馬焼を保護するのじゃ」

このお達しにより大堀相馬焼きは大いに発展しましたが
一方で新たに焼き物を始めた者から
左馬は恨まれることとなったのです

「なに！何ゆえ、焼き物をしてはならん。
我らとて懸命に焼き物を広めんがためにやっておるのに」
「左馬！お前か！お前の入れ知恵じゃろう！」
「オラは何もしらん、
オラにそんな力があろうはずがない」
「お殿様はことの外、お前をヒイキなさる。
そこにつけ込んでこのようなお達しを出させたと
もっぱらの評判ぞ」
「だいたいお前は大堀の生まれじゃあるまい」
「なに！地の者じゃあねえのか
せいぜい夜道には気をつけるんだな」
月のない夜、帰りを急ぐ左馬、その時です。

左馬は逆恨みにより
何者かに暗殺されたといわれています。
しかし、その短い人生において
左馬が世に送り出した大堀相馬焼は、
後に三春藩から招聘された陶工、
近藤藤吉郎の指導により発展を遂げました。

時は流れ、1830年幕末となり、
世の中そのものが大きく姿を
変えようとしていた時期でございます。
大堀相馬焼も代替わりし、
半谷家もその末裔の半谷滝三郎が受け継ぎ、
絵付け研究をはじめたのでございます。

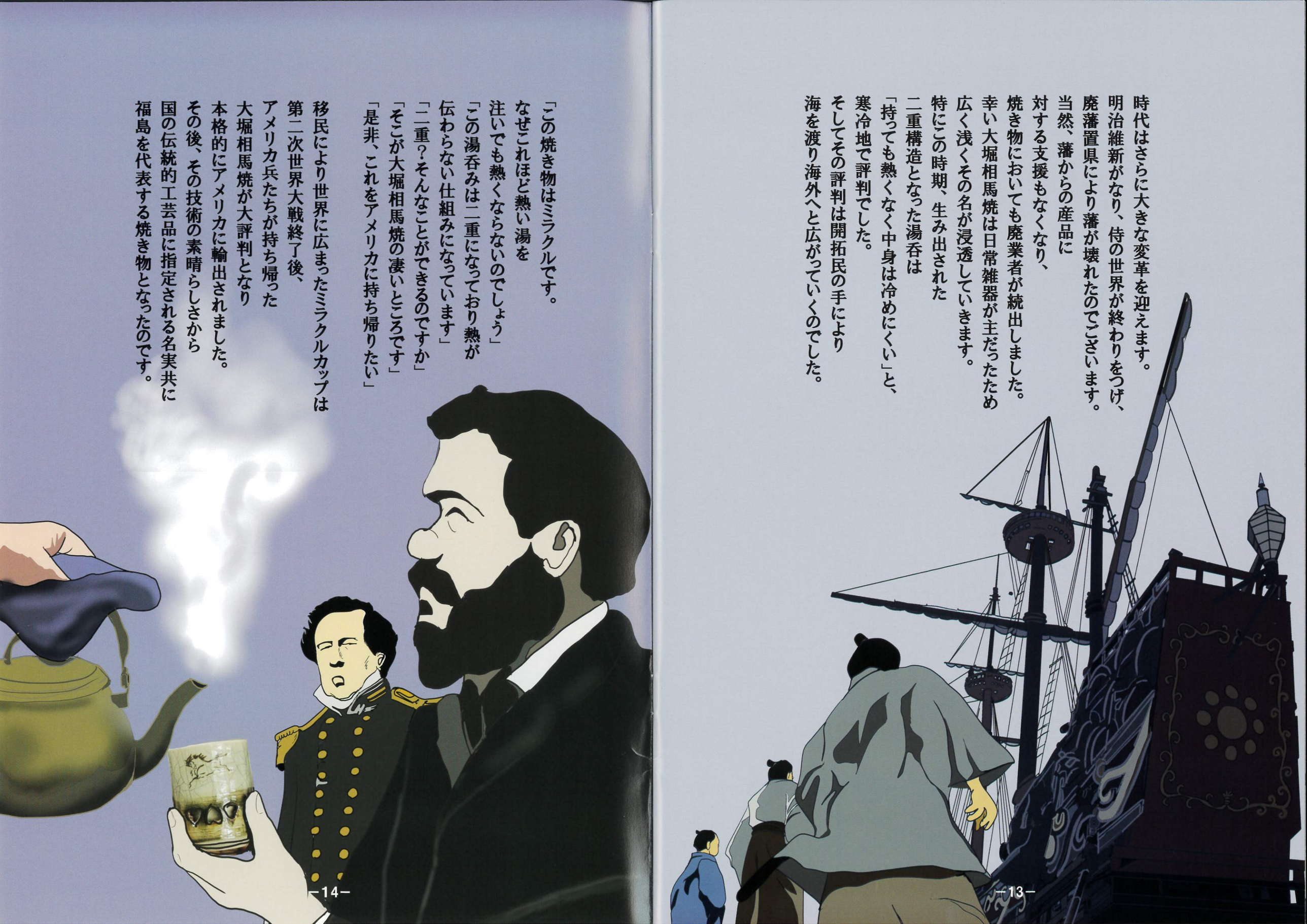
「どうじゃ、この駒絵、よかろう」
「なんじゃ、それは？」
「相馬と言えば馬、中村藩は
相馬野馬追の伝統を有する地、
藩主相馬様の家紋から知るように
繋ぎ駒や走り駒が意匠となっておる。
馬それは良い。
大堀の焼き物師に声をかけ、
馬を描かせるようにしよう。
今、窯人は何人になる」
「28人衆じゃ」
「そうか。28窯もなあ・・・」
「良きものは広まる。世の法だぁ」

「おーい、みんな窯の前に来てくれ」
「なんじゃ、何じゃ」
「こちらの窯じゃ。みんな！
ちょっとだけ静かにして聞き耳をたててくれ」

「なんとも味わいのある音じゃろうが」
「音？」
「青ひびが入る音じゃ」
「ひび？ひびがはいったのでは
売り物にはなるまい」
「まあ、これを見てみろ。
出来上がりだあ」

「むむ・・・これが出来上がり？」
「この青、そしてこのひび。
寛政6年に井手村の伝五郎が作った
銅青磁製品を元に、
このひびを加えてみた。よかろう？」
「ひびがウリとは・・・」
「偶然の産物だ。最初は失敗と思い
捨てようと思ったが、
弟子が"良い"という。
よくよく見ると面白い。皆はどう思う？」
「いいんでねえか、この風合い、いけるぞ」
「このつくり方、ワシにも教えてくれ」
「ああ、いいぞ。その代わり
これより良いものが出来たらその技、教えろよ」
「勿論よ。大堀相馬焼は28人衆で一つだ。
みんなで盛り上げるぞ」
「28人衆？・・・それは昔の話だ。
今は100人はいるんでねえか」

時代はさらに大きな変革を迎えます。
明治維新がなり、侍の世界が終わりをつげ、
廃藩置県により藩が壊れたのでございます。
当然、藩からの産品に
対する支援もなくなり、
焼き物においても廃業者が続出しました。
幸い大堀相馬焼は日常雑器が主だったため
広く浅くその名が浸透していきます。
特にこの時期、生み出された
二重構造となった湯呑は
「持っても熱くなく中身は冷めにくい」と、
寒冷地で評判でした。
そしてその評判は開拓民の手により
海を渡り海外へと広がっていくのでした。



「この焼き物はミラクルです。
なぜこれほど熱い湯を
注いでも熱くならないのでしょう」
「この湯呑みは二重になっており熱が
伝わらない仕組みになっています」
「二重？そんなことができるのですか」
「そこが大堀相馬焼の凄いところです」
「是非、これをアメリカに持ち帰りたい」

移民により世界に広まったミラクルカップは
第二次世界大戦終了後、
アメリカ兵たちが持ち帰った
大堀相馬焼が大評判となり
本格的にアメリカに輸出されました。
その後、その技術の素晴らしさから
国の伝統的工芸品に指定される名実共に
福島を代表する焼き物となったのです。

福島県の浜通りを南北に縦断する阿武隈山脈、
浪江町にはその山間を縫って流れ出る
室原川と高瀬川という二つの川があります。
そのひとつ高瀬川を下ると急に視野が広がる
沖積地に大堀相馬焼の里があります。
大堀の里は、北と西は阿武隈山脈の
山足に覆われ冬も気候が温暖で、
年間を通じて積雪もほとんど無く、
村の南端を流れる高瀬川は水量も豊富で魚も多く、
灌漑用水や生活用水にも恵まれ、
多くの人々が生活してきました。
２０１１年３月１１日、東日本大震災発災。
現在、大堀相馬焼の窯元がある地域は、
東日本大震災に伴う原発事故で
帰還困難区域となりました。
今まで何度となく乗り越えてきた
廃業の危機の経験と持前の創意工夫で、
それぞれの窯元が避難先に窯を再建し、
新しい「大堀相馬焼」を創っています。
この物語は福島県浪江町が
世界に誇る大堀相馬焼の誕生から
今日に至るまでの歴史を紹介するため
浪江まち物語つたえ隊が制作しました。

浪江まち物語つたえ隊　代表　小澤　是寛

この絵本は福島県県内避難者・帰還者心の復興事業補助金を受けて制作しました。